

## 進藤榮一先生のご退官にあたって

春は出会いの季節である。大学のキャンパスのそこかしこに、初々しい姿の新入生があふれる。だがそれは同時に別れの季節でもある。卒業生を送り出すのは教育に携わる者すべてにとって喜びであるが、しかしそこに一抹の寂しさがともなっているのも事実である。

とりわけ二〇〇三年の春は、われわれ筑波大学社会科学系・政治学専攻の教員すべてにとって、生涯忘れられない別れの時となることだろう。なぜなら長年われわれの同僚であり、また先達であった進藤榮一先生が、このたびめでたくご定年を迎えられ、筑波大学を去られるからである。独立行政法人化という難事業を目前に控え、これまで以上に先生のお力が必要であることを考えると慚愧に堪えない。だがそれでもわれわれは別離の悲しみを抑え、先生の新たな旅立ちに心からお祝いを申し上げねばならないであろう。

進藤先生が本学で教鞭をとられるようになったのは本学創設後ほどない一九七五年のことである。それ以来、学部（社会学類）、大学院修士課程（地域研究研究科）、そして博士課程（社会科学研究科および人文社会科学研究科現代文化・公共政策専攻）などで教育に携わってこられた。最新の研究成果を惜しみもなく学生諸君に披露されるとともに、貪欲なまでに社会や歴史の真実を追究される姿勢を目の当たりにして、知的な刺激に心を弾ませた者はまさに無数といってよい。彼ら筑波大学の卒業生にとって、進藤先生の講義や演習に接する機会を持たれたこと自体、無形とはいえじつに貴重な財産のはずである。また学系長（一九九八年四月～一九九九年七月）をはじめ、学内のさま

さまざまな業務に熱心に取り組まれ、本学発展に多大の貢献をされたことも特筆すべきであろう。

三〇年近い歳月は、新進気鋭の国際政治学者として名を馳せた先生を、この分野では誰知らぬ者のない重鎮に変えた。後に掲げる研究業績のリストがそれを見事に証明しているであろう。また、毎年、大学院入学試験が行われるたびに、ぜひとも進藤先生のご指導をと願う受験生が筑波の地に参集したという一事を見てもそれは明らかである。また、しばしば他大学で非常勤講師をつとめられたのも、他の追隨を許さないそのご研究の成果による学生諸君の薫陶が渴望されたからであろう。

先生のご活躍の舞台は日本国内にとどまらない。プリンストン大学、ハーバード大学、オックスフォード大学など、さまざまな国の機関から客員教授として招請を受け、あるいは共同研究への参加を要請されてきた。逆に先生は、海外から研究者などを招いたシンポジウムなども積極的に開催されてきた。こうした内外のさまざまな学会、研究会、講演などで先生がご多忙をきわめられたことは、われわれにとつては先生のご指導を受ける機会を失うことを意味しており、その意味では残念しごくであったが、それもわが国の学界全体のためにはやむをえないものとして甘受すべきことであつたかもしれない。われわれとしては先生の遺産を継承し、発展させることを誓うのみである。先生のご研究の一層のご発展を心より祈念するしだいである。

筑波大学社会科学系政治学専攻教官一同